

親の中に入ってみた

「アホは若く見える」

憎めない人をリスペクトした父光雄^お(83)のひと言。関西人特有のこの言い回しを、わたしは賞金目当てで高橋書店の「手帳大賞、名言・格言部門」に応募してみた。入賞は無理だったが、優秀な作品を集めたという、名言・格言日めくりカレンダーに載せてもらった。あの石頭のどこからこのひと言が出てきたのかと呆れたり、感心したりで、初めて親の内面に興味が湧いた。

昭和十年、農家の次男に生まれる。五人兄弟の長男は大事にされていたそうで、

「兄貴がおるのに、わしばっかりこき使われた。次男はカスヤ」

とボヤク。祖父の晩酌用焼酎を買いに行かされるのが日課だった。無性に腹が立った高三の時、留守の間に飲んだらブツ倒れたと笑う。

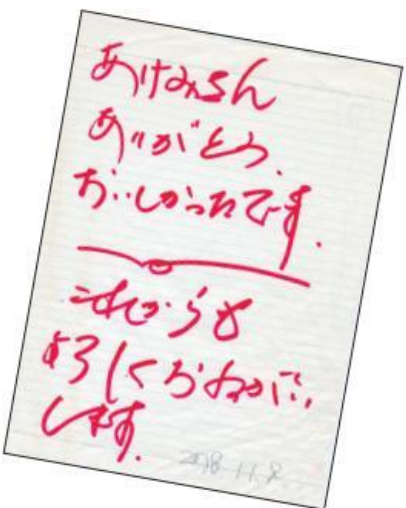
「自分の言いたいことだけ言うて、人の話は聞く耳持たへん。やのに、外面は良すぎるええかっこしいや」

とこぼしていた母は、二〇〇八年に他界。三人でバランスのとれていた生活は終わり、残された父との格闘が始まった。

「言うた」「聞いてない」、「渡した」「もろてへん」、百二十パーセント父の思い込みなのに絶対認めようとしてない。毎回、「死ねー」と思うほど腹が立つ。が、千歩譲って、「ハイ、ハイ、勘違いしてたわたしが悪うございまして」とこちらのせいにしてやると、ドヤ顔に変わる。だが、ひ

と息つく。「あれ？　そういえば確かあの時……」と思い始める。とたんに、何もなかったかのような顔でわたしの機嫌をとりにくる。

わたしと近所の居酒屋に行った夜は、「あけみさん　ありがとう、おいしかったです。これからもよろしくおねがいます」と書き残したりする。言っておくが、もしこれで何百回もの「死ねー」がチャラになるとか思っているなら大きな間違いだ。



その手には乗りません

以前病気で入院した父は、主治医に早く退院させて欲しいと手紙を書いたららしい。書くことが好きなのかたずねると、「小学生の頃から字はきれいやった」と自慢げに答えた。

安定しているからと親戚にすめられ就職した国鉄(現在のJR)でこれが役に立つ。貨物駅だった京都梅小路駅に配属された時、履歴書の字を見た上司から、貨物列車のダイヤを書く業務を任されたのだ。事故などの緊急時でも素早く対応できる仕事ぶりが評価され、大阪鉄道管理局に度々出向いて書いていたという。

「責任は重たいし、しんどい仕事やったけど、声がかかるうちが花や思て断わらんかった」

さらにキャンペーン時には、他の部署から「事故防止月間」などの大きな看板を書く事も頼まれたそう。いろいろな部署とのつながりができ顔が利くようになること、誰にでもできる仕事ではないこと。このふたつのプライドがモチベーションになっていた。

晩酌をしながら聞くと、仕事をしていた頃の話はいつまでたっても終わらない。今、こんな風に娘に楽しく話せるのは幸せなことだ。このまま母のところへ逝けるよう、そこでそこで迎えに来てやってと毎朝遺影に頼んでいる。が、悪運だけは強い父、先日も畑仕事に倒れた熱中症からしぶとく生還した。そこそこで「はまだまだ先かもしれない。」